

標的アイソトープ治療の現状と将来展望

国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構
放射線医学総合研究所 臨床研究クラスタ 分子イメージング診断治療研究部

東 達也

我が国では急激な甲状腺癌の増加やRI内用療法施設の実稼働ベッド数の減少などから、RI内用療法施設への入院待ち待機時間が延長し地域格差が広がっており、その現状はがん対策推進基本計画がめざす「医療の均てん化」とはほど遠い状況にある。2015年国会においてRI内用療法に関連する質問主意書が提出され、これに対しRI内用療法は重点的に取り組むべき課題であるとの政府答弁がなされており、次年度から始まる次期のがん対策推進基本計画での研究・診療の推進等が期待されている。我々は学会を挙げて、我が国のRI内用療法のあるべき将来像を見据えた提言を行ってきた。この間、欧米では甲状腺癌に対するヨウ素-131 (I-131) を用いたRI内用療法から、さらに進んで多数の核種、多数の製剤が登場し、theranostics (診断と治療の融合) を体現した「標的アイソトープ治療 (Targeted Radioisotope Therapy: TRT)」としての幅広い研究、臨床応用が進んでいる。本講演では欧米での現状・進展をご紹介し、我が国では立ち後れているこの標的アイソトープ治療の将来展望をお示しし、日本核医学会や量研機構の取り組みをご紹介する。